



人手不足時代の 人材サービス

《連載》
第5回

集合知、クラウド・ソーシング、タイムシェア型就労

武藤泰明



武藤泰明 (むとう やすあき)
1955年生まれ。1980年東京大学大学院修士課程修了。株式会社三菱総合研究所主席研究員を経て、2006年早稲田大学スポーツ科学学術院教授職任。専門はマネジメント。

人手不足の解消には労働力供給が必要だが、ここで気づいておきたいのは、必要なのは労働「力」であって労働「者」ではないという点である。この連載のこれまでの検討でわかってきたことは、労働力、というより労働者の供給が、かなり難しいという点である。既婚女性は、介護・福祉分野で大量に「吸収」されている。新卒定期採用されなかった（しなかった）フリーターは、その後、意外に正規労働者になっている。企業内の潜在的な失業者が労働市場に出てくればよいのだがそれもおそらく難しい。労働「者」で

し、リナックスのプログラムを進化させるためにも、かなりの知識が必要である。そんな人々の平均的なプロフィールはもちろん失業者ではなく、何か仕事を持っている人、それも高度の専門職だと考えてよい。つまり、フルタイムの仕事をしている人が、オフタイムにボランティアをしている。片手間といえば片手間である。そしてこの片手間ボランティアに百科事典は駆逐され、ウィンドウズはシェアを奪われている。資本主義と株式会社社の脅威と言ってよいだろう。

クラウド・ソーシング

集合知ではないが、ウェブを使って、会ったこともないプロに仕事を頼む方法がある。クラウド・ソーシングと呼ばれる。クラウドは流行りの「クラウド・コンピューティング」とは違う。クラウドは「雲（cloud）」ではなく「群衆（crowd）」を指す。方法としては、何かウェブ上の掲示板のようなものに発注内容、つまりこんなプログラムが欲しいと書いておく。そうすると誰かからプログラムが届く。その中で優れたものを購入する。

こんなことはITの世界だけかと思っていたがそうでもない。私が所属する大学院には外国人留学生が多くいるのだが、その留学生が研究計画やレポートをウェブに載せておくと、必ずしもできのよくない日本語を完璧なものに変えてくれるサービスがあるらしい。しかも無料である。単位や学位を出すという観点からはルール違反

はなく労働「力」が必要なのだとなると、供給される労働者は、どこかよその社員であっても構わないだろう。

集合知、マス・コラボレーション

こう書くとき現実味のない禅問答のように聞こえるかもしれないが、実例がある。ウィキペディアとリナックスである。ウィキペディアについては、どこか別の会社で働いているという人が多い。目的はわからないが稼ぎたいと考えてやっている。仕事ぶりが真面目なのだそう。一種のタイムシェアである。クラウド・ソーシングでプログラムを提供してくれる人には、おそらく本業がある。留学生の論文を添削してくれている人も同じであろう。これらもタイムシェアである。

産業構造の転換とタイムシェア型就労

私が知っている食品メーカーでは、ビジネスが好調で週末も工場が稼働しているのだが、そこで仕事をしている派遣社員の中には、ウィークデイはどこか別の会社で働いているという人が多い。目的はわからないが稼ぎたいと考えてやっている。仕事ぶりが真面目なのだそう。一種のタイムシェアである。クラウド・ソーシングでプログラムを提供してくれる人には、おそらく本業がある。留学生の論文を添削してくれている人も同じであろう。これらもタイムシェアである。

歴史を少し振り返るなら、高度成長期の工場労働者は、本業は農業だった。早朝に野良仕事をしてから工場に出かける。農業から工業への転換の過渡期だったということである。もつと遡ると、明治半ばに日本には2万を超える小学校があった。教育する能力を持っていたのは、もと地方公務員で、明治維新の廃藩置県で失業していた武士階級であろう。武士とは身分であって職業ではないというのが今日の職業観である。明治期における士族も身分であるが、武士にとって武士とは職業だった。彼らは武士であるとともに学問や読み書きを教えていたとみるべ

は説明するまでもないだろう。ウェブ上の百科事典みたいなもので、コンテンツ（事典の内容）を書いているのはボランティアである。コンテンツは「誰か」によって、書き換え続けられ、内容が進化していく。このようなスタイルを集合知と呼ぶ。無償の労働によって提供された多数の人々の知が、営利事業として刊行されている百科事典を「駆逐」している。

リナックスはパソコンのOS（オペレーティング・システム）である。そういうと何のことかわからない人も少なくないと思われるが、世界のPCのOSは現在マイクロソフト社のウィンドウズ、アップル社のマックOS、そしてリナックスに収斂（れん）している。そしてリナックスはウィキペディアと同じく、集合知型の無料ソフトウェアで、ソースコード（プログラム）は公開されており、常に「誰か」によって直され続けている。

ウィキペディアやリナックスで行われている「大勢の人が同じ目的を達成するために作業する」ことを「マス・コラボレーションと呼んでいる。コラボレーション」といって「一緒に」「共同で」何かするような印象を持つ。たしかに人々は協力するのだが、物理的な意味で一緒にいたり共同作業をするわけではない。にもかかわらず、していることは、同じ目的に向かっている共同作業になっている。インターネットがそんな共同作業を可能にしている。

マス・コラボレーションにどんな人が参画しているのかは、よくわからない場合がほとんどである。とはいえウィキペディアの各項目を書き換えられるのは、そのテーマについて知識のある人だけである。

きであるう。

このような検討から導くことのできる仮説は、産業構造の転換の節目には、「兼業者」が増えるということなのかもしれない。新しいビジネスが大量に人材を必要とする。しかしそんなに大勢の調達には難しい。だから、これまでの仕事を続けながら新しい仕事に就く。状況としては、戦後の工場労働者も明治中期の小学校も同じであろう。

「余った能力」を仲介する市場をつくる

人材ビジネスから見た課題は何かというところから「ここで働いている人の時間をもらう」というビジネスモデルが成立するだろうか、ということになる。換言すれば、現在の事業とは異次元のビジネスを始めるといえることである。現在のビジネスには人が集まりにくい。とはいえ集めるために工夫をこらす、というのは続けるとして、これとは別に、世の中全体に存在する（と思われる）「余った能力」の仲介をするビジネスを始めるといえることである。つまり、市場を創造する。

仮に6000万人の就業者の1割が1週間に1時間だけ別の仕事をすると仮定すると、年間の総労働時間は約3億時間で、これは年間1500時間働くフルタイム労働者20万人分になる。この人たちが土曜日だけ5時間別の仕事をするならフルタイム労働者100万人分である。つまり、タイムシェアはあなどれない。